

発射を命じた。擲弾筒の威力はすさまじく、死傷のほどは分からないが、怯んで散ってゆく敵を確認して、急遽乗車出發を命じた。

しかし残念なことには、この間、歩哨一人が敵弾に倒れ間もなく息を引きとった。そして第一車両と積載の器材は放棄せざるを得なかった。

興奮と慚愧の念を抱いて、予定時間を約四〇分遅れて暮れた寧波の旅団本部に到着、駐屯部隊に兵の休息を依頼し、私は西脇旅団長に報告に赴いた。

「ご苦労であった。しかし兵を失ったことは残念」とだけ言われ、車や器材のことには触れられなかった。私の悲しい一日の任務は終わった。

## 戦争体験記

徳島県 内田 善一

私は、昭和十七年七月十日一枚の召集令状で家族に別れを告げて歩兵部隊に入営した。一か月の歩兵の教育を

受け、八月から衛生兵の教育を三か月で終えて、十一月には中国大陸へ渡った。揚子江を遡り武昌港に上陸し、師団本部や野戦病院の駐在する感寧で外科病棟に勤務することとなり、戦地での初めての正月を迎えました。

正月を喜ぶ間もなく空襲を受け、患者、衛生兵、病院勤務の地元民等二十数人の尊い生命を失い、その光景を目のあたりに見、戦争の悲惨さを感じ、自分の身を守るのは自分のみだという思いを深くしました。

十八年四月、部隊移動で洞庭湖を渡り、華容という町に野戦病院を開設。私はそこから約二〇<sup>キ</sup>前線の石首という集落に設けられた第一線の患者収容所で勤務することとなり、軍医以下二〇人くらいで前線から運ばれる負傷兵の応急処置にあたった。

負傷兵は追撃砲弾を受けて顔の半面がない者、片手片足のない者、腹部の表皮がなく内臓がはみ出している者等、その残酷さは書き現わしようがない。負傷兵が次から次と運ばれてくるので、衛生兵の手が足らず、不眠不休で処置しても一日一回のガーゼ交換が精一杯だった。

そのころは七月の暑い最中なので、傷口から二<sup>テ</sup>く<sup>ラ</sup>

いのうじ虫がはい出る有様だった。

「衛生兵、早く来てくれ」と呼ばれても、「今いくから待ってくれ」と言いつつ、次々と手当てをし、行ってみるともはや虫の息、手をとって「しっかりしなげや駄目だぞ」と励ますが、それでも最後の声で「衛生兵殿ありがとうございます」と言いながら、肉親の名を呼びつつ、若い生命を失う兵は一日に何人もおり、私はただ手をとって合掌するのみだった。

その後、私は歩兵部隊に転属し、中隊付きの衛生兵として勤務することとなり、十九年二月から転戦また前進と幾多の戦闘をし、激戦の日々が続いた。なかでも十一月九日から四昼夜に及ぶ激戦は、今思い出しても戦慄を覚える。匍匐前進中右脇の戦友は敵さんの仕掛けた地雷に触れ、体が三層くらい打ち上げられ、散々になって地面に落ちた。また横に並んで前進中敵弾で頭部貫通で一言もなく、一瞬のうちに倒れた戦友、彼らの顔が今でも目に浮ぶ。この戦闘だけで私たちの中隊から百数人の戦死者を出した。

思えば、洞庭湖畔を出発以来約四〇〇日、一日に数十

歩き、野で山で民家の土間で銃を手に眠るという状態が続き、また夜行軍の時など、山また山、道なき道のなるところを馬のしっぽを握って歩きながら眠り、足は運んでいるが夢遊病者のような有様だった。

さらに南進し、広東地域に出て約二か月余りは比較的平静な毎日だった。戦友たちと長い戦闘の苦難を語り合いながら、不思議にも生き長らえたことを喜びあった。しかしその陰に、連隊長以下一六六八人の尊い犠牲者があったことを肝に銘じ、英霊のご加護によるものと、心から感謝し、ご冥福をお祈りする毎日である。

敗戦後は南京城外で抑留者として道路の改修工事や中国人将校の家庭の配水路やトイレの掃除等をさせられた。六か月あまりの捕虜生活を終えて南京を去り、上海から二十一年五月二十三日博多港に上陸、ここで召集解除になり、やっと我が身が自由な体となった。以後四十五年の平和な歲月の中で、戦争体験も風化しつづけると言われる。

しかし、言葉で言いつくせない従軍中の辛苦や悲惨の数々を、また大陸の奥地で肉親の名を最後の力で呼びな

が若い命を失った戦死者のこと、身の一部分を火葬にし、その遺骨を抱き戦線を共に行軍した戦友のことを私は忘れることができません。

遠い異国の地で果てた友を思い出すと、目頭が熱くなり、手を合わせ、心の中で念仏を唱え、亡き戦友のご冥福を祈ると共に、ご遺族のご健康とご多幸をご祈念申し上げます。私の体験記とする。

## 湘桂作戦

新潟県 長田 栄太郎

中支における湘桂作戦は、日中戦争中最大の大決戦となった。湘桂作戦は粵漢（広東―衡陽―漢口）、湘桂（衡陽―桂林）両鉄道を打通して沿線の米空軍基地をつぶすことであつた。

昭和十九年十二月二日、第三師団（達）は貴州省八塞へ。同月三日、第十三師団（鏡）は独山を占領。いずれも最果ての地貴州省に突入後、反転作戦に入ったが、米

空軍襲来と中国軍の反撃、霧のように忍び来る苗族の恐怖が連続し、多数の死傷者を出した。

日本軍六二万、中国軍三〇〇万は湖南―広西―貴州の各省に転戦した。湘桂作戦の攻撃軍は第十一軍で第三（名古屋）、第十三（仙台）、第三十四（大阪）、第四十（善通寺）、第五十八（熊本）、第六十四（揚州）、第六十八（九江）、第百十六（京都）、第三十七（久留米）および関東軍の第二十七（天津）の各師団で、これに揚子江の海軍の一部および第五空軍の飛行団が協力した。

長沙攻略後は衡陽に攻撃目標は当てられた。第一次攻撃、第二次攻撃を第六十八、第百十六の両師団が行つたが失敗した後、第十三師団と第五十八師団を増援し第三次攻撃をしかけた。衡陽を死守する中国軍を日本軍が包囲し、その日本軍の救援部隊を敵が包囲する戦線は、混乱の極に達した後方も前線もない有様。かつての二〇三高地もこんなだったかと思われるほど凄惨な死闘が、四十七日間も真夏の焼け付くような暑さの中で展開された。一時は「インパール」作戦の二の舞かと憂慮され、第六十八、第百十六の両師団は戦力の七〇％を失つた。